

ハヌルデイスカツシヨン

テーマ一

二

三

四

造営の年代について

半島、東アジアとの関係

佛教、祭祀、信仰

何のために造られたか



写真5 パネルディスカッション熊本会場

コーディネーター

佐藤 信 (さとう まこと)

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、一九九六年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は、日本古代史、文学博士。

パネリスト

赤司 善彦 (あかし よしひこ)

九州国立博物館展示課長。

狩野 久 (かのう ひさし)

元岡山大学教授。

大西 修也 (おおにし しゅうや)

九州大学名譽教授。

佐

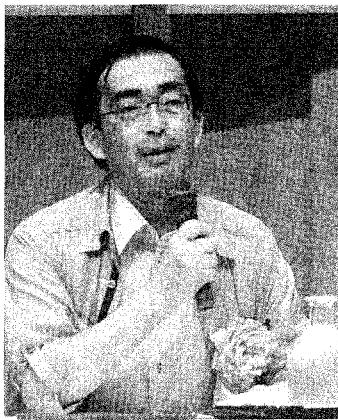
藤…ありがとうございました。只今ご紹介いただきました佐藤信です。いろいろご縁がございました。

コーディネーターを務めさせていただきます。本日は暑い中をおいでいただき、これまで三人の講師の方の話を聞いていただいたと思います。赤司さんの大変興味深い新しい知見を開陳していただいたご講演。それから狩野さんの狩野節という感じのご講演は、私もアツと言うような内容のお話を聞いていただきました。大西さんも大変緻密なご講演で、韓国に留学して研究されたということで慶州の周りの国防と仏像の話も大変新鮮に伺つたわけです。皆さんと一緒に大変刺激的な時間を過ごしてきたわけですが、これから約五〇分ほどパネルディスカッションをさせていただきたいと思います。

鞠智城をテーマにしてこういう大変興味深い話をたくさん聞けるということ自身が、鞠智城の魅力を示していると思います。今回は、最初に矢野さんから最新の研究成果のお話もあつたわけですが、これは今年の三月に熊本県教育委員会の方の大変な努力によりとても精度の高い「総合報告書」が刊行されました。この報告書はこれまでに出土した土器や瓦そして遺構を全て検討した上で、その成果をまとめたもので、はじめていろんなことが議論できるようになつてきました

今日は三人のご講演の先生方がパネリストとして、とりあえず私が考えた四つのテーマに沿つてお話を聞いていただこうと思います。まず一つは鞠智城の造営年代についての問題。二つめは朝鮮半島や東アジアとの関係で鞠智城をどうとらえるのかと

写真6 佐藤 信氏



今日は三人のご講演の先生方がパネリストとして、とりあえず私が考えた四つのテーマに沿つてお話を聞いていただこうと思います。まず一つは鞠智城の造営年代についての問題。二つめは朝鮮半島や東アジアとの関係で鞠智城をどうとらえるのかと

いう問題、三つめは鞠智城と仏教、あるいは神器祭祀もふくめて、鞠智城と祭祀・信仰という問題。そして最後に鞠智城は何のために造られたかという問題を、短い時間ですが議論していきたいと思います。まず最初に造営の年代については、私も今日お話を聞いてハッとしたのですが、赤司さんが鞠智城の貯水池は鞠智城が出来る前に灌漑の用水として、渡来系かもしれない人達が先に地域の開発にあたつた成果ではないかということをおっしゃいました。確かに現地に伺うと鞠智城の西側には素晴らしい条里制の水田地帯が残っています。鞠智城の造営年代関係では、もちろん、発掘調査成果を受けて、七世紀の白村江の戦いの後なのか、あるいはお話の中でふれられたように、最近の古代山城の研究では齐明天皇が、白村江に出兵する段階にまで遡らせてみる考え方もあるということですけれど、その問題について赤司さんの方から少し話を聞いていただけないでしようか。

司…今のご質問ですが資料篇六三頁の年表を見ていただきたいと思います。そこに六四五年からの内容が書いてあります。六六四年に筑紫に防人、烽とぶひを置き、水城を築く。翌六六五年に大野城、基肄城を築き長門の国にもまた城を築くと記されています。

これまでの解釈としては六六三年の白村江の敗戦を受けて、翌年に水城、その翌年に大野城、基肄城を築いたというのが定説です。つまり敗戦が契機であるという考え方があるわけですが、私はそうではなくて六六〇年の段階で、百済が滅亡した段階がありますが、齐明天皇が百済への援軍を決めた段階で筑紫の防衛戦略というものが練られていたのだろうと思うのです。そして六六一年朝倉橋広庭宮というのが筑紫のどこかに出来るわけですが、もしかしたら、大野城、基肄城が築かれた地域を想定していたのではないかというようなことを近年考えたのです。



写真7 赤司 善彦氏

実は最近の一つの成果として大野城の今日スライドをお見せしました城門がありますが、その城門からは屋根を支える木の柱が出土しました。その木の柱を年輪年代法という年代測定法で年代を測りました。例えば樹齢二〇〇〇年の木があります、その木を現在バサツリと輪切りにすると、年輪を見ることができます。その年輪の幅は全部違いますよね。暖かい時には年輪の幅がぐつと伸びますし、寒い時には縮むわけです。前年との輪の幅の差をグラフにすると幅が広い時、狭い時を折れ線グラフで表示することができます。現在から過去に二〇〇〇年分の折れ線グラフができるわけです。これを物差しにすることができます。出土した木の柱の年輪もグラフにして、先程の二〇〇〇年の年輪グラフに合わせると、仮にその折れ線グラフがぴったりと一致すれば、伐採された年代が出ることになります。もちろん、樹木の種類や地域によって年輪の出来かたは異なりますから、これはあくまでも理屈です。

そのような方法で大野城の柱を計ったところ伐採された年代がわかりました。年輪年代測定で六四八年という数値が出たのです。表面の表皮も剥いでいるので、一、二年プラスすると、六五〇年に伐採されたということが確定をいたしました。そうしますと、この年表にありますように六六〇年に百済が滅ぶわけですが、それよりもさらに一〇年前にもうすでに大野城の準備がはじまっていたのかかもしれないということが考えられるわけです。もちろん木材を寝かせていて、実際に使用したのは

一〇年以上経つてからということも考えられます。大変興味深いのはその木柱が高野槧でした。高野槧は、九州にもいろいろあつたという話もありますが、実は年輪年代測定の物指しが奈良の都から出土したものだったのです。奈良で用いられた用材にぴったり合うということは、大野城の高野槧が、九州のものではなくて近畿から運ばれてきた可能性があるわけです。大野城の築城などが国家的なプロジェクトだということを裏付けるものになるのです。

一方で六六五年に大野城、基肄城を築くと記されているのは、築き始めたという解釈と完成したという解釈があります。この年に完成したという見方ができるのではないでしょうか。奈良時代に築城された怡土城は一三年の期間が掛かっています。このことから考えましても、やはり七年、八年。今日の狩野さんの話にもありましたが、とても時間が掛かっていたのではないかと思います。そういうことで大野城の築城開始を六六五年から溯つて考えているわけです

それから鞠智城の築城年代ですが、これは一覧表に示しました。資料篇一二三頁にあります。それを見ていただきますと、古代山城の各種の特徴を比較すると、大野城、基肄城、屋嶋城、金田城とう変わらない時期に築いたということは間違いないと思います。但し、それが天智朝期の六六五年といふように絶対年代で言えるかというと考古学的には難しい面があります。これらの特徴は、ある部分は共通しますが、別の部分では違つていています。一番大事なのは、築城に用いられたさまざまな技術の系譜関係です。石積みの技術であれば石墨や石垣が少し異なるところが気になります。土墨は共通しています。今日、唐尺という話が出ましたけども鬼ノ城の土墨も唐尺という一尺が二九・七センチメートルの単位尺を使って築造しているということが分かつています。大野城も土墨の柱穴

の間隔はだいたい約三〇センチ近い単位尺を用いているようです。おおよそですけど、鞠智城もだいたい同じ単位尺になります。

そういう点では共通していると思うのですが、もっと細かいところまで見て本当に一緒に一緒にまとめて見ると、それは難しいところがあると思います。それからこれは山城研究の難しいところだと思いますが、最初に築城された時の姿というのがなかなかわからないのです。私たちは増改築などを経て廃城された時の姿しか見ることができないのです。初築がどういう姿であつたのかということですが、例えば、石墨が他の山城と異なるという話をしましたが、これも本当に築城時のものかを疑うことも必要です。修築したもの可能性を含めて、今後も分析が必要だと思います。以上です。

藤・唐尺というのは中国の唐の物指しですね。建物など構造物を造る時にどういう物指しを使って、計測して施工しているかということが問題で、使用した物差しの長さがわかつてくると、時代によって物差しの長さが少しずつ変化しますので、それで年代がわかるということだと思います。そういう地道な調査成果がないと、なかなか結論まで出せないと思す。狩野さん、今の鞠智城の造営が白村江の敗戦よりも前ではないかという説もあるのですが、いかがでしょう。今日のお話でおつしやった『日本書紀』の記載の限界性とも併せていかがでしょうか。

狩野…さつき大西さんに『日本書紀』なんていうのはあんまり信用できないよと言われて少しショックを受けているのですけど。そう言われると古代史研究というのはなかなかできませんので、信用できないうなりに何か信用できるものを引っ張り出そうと、それが古代史の研究だと思いますが。ただ確かにね、天智三年とか四年に城を築くということが『日本書紀』にあります、この記事をどう読むのか

ということはありますね。それは出来あがつた時期なのか、これから築くという意味なのかといふと、私はどうもやはりその年から造りはじめたといふうにしか読めないのではないかと思います。つまり、城というのはさつき赤司さんも言いましたように、かなり綿密な設計をして造っているのですよ。そんなに何か適当に、要するに人を集めてワッと城壁を築いたりとかいうのではなくて、まず設計図ができるでそれを元にしてどれだけの材料がいるかという準備をした上で城壁を築くのだと思いますけどね。その上で中の建物等を作ったりするので、完成するには相当の年数がかかるのではないかとうふうに見ますので、これはまず造りはじめの年代を示すのではなかろうかと。私はそんなふうに見ていますけど。

佐

藤…先ほどの赤司さんの話だと、高野槙が近畿地方からもたらされて大野城の造営に使われているということだと、倭の王権が直接材料も持つてきて築城したということになるのですが、私は九州の勢力も協力しないと出来ないのでないかと思いますが、その点は狩野さん、いかがでしょうか。

狩

野…その点で、菊池氏というものをこの鞠智城を造る第一の勢力として考えられるかどうか。奈良時代から平安時代の文献に、肥後の国の郡司になつた人の名前がわかつているものが結構あるのです。玉名ですと日置氏^{ひぎ}、益城郡^{ましき}だと肥公とか、そういう郡司の名前がわかる例があるわけですね。でも、菊池郡は不幸にしてその資料がないのです。郡司が居なかつたというわけではありませんから、その豪族の名前が知りたいわけです。この地域にも古墳はいっぱいありますし、昨日もたまたまチブサン古墳の中に入ることができて、大変感激して見せていただいたのですが、たくさんいろいろな古墳がありますからああいう古墳を造った豪族が居たわけでありまして、その名前を知りたいわけです。こ

佐

藤..造営年代については、大西さんの方から今日、大変興味深い百済仏のご説明があり、最近鹿児島でもそれよりさらに遡るかもしれない百済系の金銅仏こんどううぶつが見つかっていたというお話がありました。

鞠智

矢野さんに大いに期待しておるところでございます。

考えますと、邪馬台国は非常に解けやすくなるのです。ですからそこまで遡ると話が飛躍しますし、それからまた肥公（火君）との関係がどうなるかということも考えなければいけません。でも、在地の力なしではこんなお城はできませんよ。それは国家的事業ですから大和の勢力が城作りに関わったことは間違ひありませんけど、実際に城を造るとなりますと在地の力なしではできません。その在地の力の豪族の名前を知りたいのです。いずれそれも鞠智城を掘つていたら出てくるのではないかと、

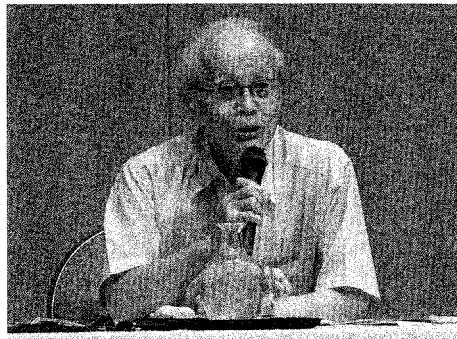


写真8 狩野 久氏

城で出土した金銅仏よりもう少し遡る七世紀の半ば頃のものが鹿児島にもあるというお話を。鞠智城の築城が六六三年のもう少し前なのか後なのか、あるいはさらにそれよりずれた前後にするのかという問題・関心と併せて、どうでしょうか。

大

西

..制作年代について比較するところが確か少し抜けていたと思いますが、スタイルが古いということはおそらく、鹿児島の伊作像が百濟系の金銅仏であることを示しているのでしょうか。金銅仏にもいろいろな技法がありまして、宝冠の冠帶の両端に小さな穴があけてある。あるいは天衣の襞の部分に細い鑿彫たがねぼりがあり、その中に鍍金が埋まっていることから、後で鍍金したことが分かるのです。そういう細い毛彫りといふか鑿彫りを非常に多用するのは百濟仏の大きな特徴なのです。それから伊作像に

一番近いと見られるのが横井廃寺址出土の金銅菩薩立像です。今日は説明

しませんでしたが、奈良東大寺前の道を真直ぐ南に吉市まで下り、そこから少し東に登った丘稜から出たと言われています、胸元に両手で宝珠を抱いています。ですから、百濟の古式な仏像が直接もたらされたか、仏師がやつてきて造ったかわかりませんが、そうした影響下で制作された飛鳥前期の彫刻、それが鹿児島からも出てきたと理解しています。制作された時代に鹿児島にもたらされたというのではなくて、律令体制下にくり込まれた地域には、当然そこに僧侶が送られ、布教活動がおこなわれるということであって、それに伴つてすでにあつた仏像もたらされるそのように理解しているわけです。



写真9 大西修也氏

佐藤：そうしますと鹿児島の金銅仏は、持統六年に出された大宰（さむ）の帥をして僧侶を大隅に派遣して仏教を

広めなさい

という持統天皇の詔の延長上で理解するということですね。そうすると鞠智城の百濟系の仏像などは、例えば大野城や基肄城の造営の際には憶礼福留とか四比福夫（しきふくぶ）とか百濟から亡命してきた上級貴族が築城を指導しているので、例えばそういう経緯で来たという考え方もあり得ますが、鞠智城の仏像はそういうことよりは大和王権による九州における仏教の拡大というなかで理解されるのでしょうか。

大西：そこが問題だと思います。なぜスタイルの新しい仏像でありながら、鞠智城の築造期にもたらされたのか。宝珠捧持菩薩の源流といいますか、宝珠に変化する前の舍利供養菩薩の意味を持ち、かつ彫刻的にも新しいスタイルのものが何故鞠智城から出てきたかということです。そうしますと、ちょうど将軍たちがやつて来るのが六六四年、それからすぐに築城へ派遣されていくわけですね。私も先ほど狩野先生がおっしゃったように、山城は『日本書紀』に出てきたところが造り始めでないかと思つてているのです。そう考えると、畿内の高安城というのは高安城を造るという記事が出てきて、それがほぼ使えるようになつて倉庫も出来る。だからそこに食糧も運び込むというよう、時系列で見るとつながつていくわけですね。そうしますと鞠智城跡から出てきた仏像というのは、百濟ではともかく、日本の彫刻の流れでいきますと本当はもつと遅くなつてから出てくるものなのです。あれが鞠智城と素直に結びつくというのは、先ほど弥勒寺のところでお話したように、七世紀の遅くとも六四〇年頃までのところで、隋はもとより初唐の文化がどつと入つてきた。それによって百濟彫刻が今までとは違うスタイルへと一気に動こうとしていた。それがあの彫刻には見てとれるということなのです。だ

から日本の彫刻史の流れの中では理解できない。百濟にあってはじめて理解できる。それが入ってきただ時期ということになれば、若し將軍なんかが持つて来ればストレートに繋がっていくのかなどということです。

佐

藤・百濟における最先端の文物がストレートに鞠智城まで来ているということで、それはおそらく向こうの人が持つて来たとみるのが妥当ではないかということですね。わかりました。この築城の問題は、今日の赤司さんの話でも大野城の築城が六五〇年代まで遡るかもしないというデータが出てきたということですが、それと『日本書紀』に書いてある築城の記録、そして百濟の亡命將軍が九州に来たのは六六三年以降だと思いますので、そういうものをどう整合的に理解するのか。これについては、これからもっと検討しなければならない。鞠智城に関しては、矢野さん達のこれから発掘調査や研究にかかるところだと思います。もちろん、大野城も同じことだと思います。これぐらいにしまして、二番目の朝鮮半島や東アジアとの関係で鞠智城をどうとらえるのかという問題に移らさせていただきたいと思います。このテーマでは、例えば赤司さんのお話では、私も大変興味深かつたのですが、古代の山城における門の門柱と、扉の軸受けのあり方にみられる門の構造が時代と共に変わっていくのではないかという具体的な整理をしていただきたり、あるいは生の木の枝を版築の土墨を突き固める時に底の方に敷き詰める敷粗朶工法が直接半島から来ているのではないかという指摘がありました。これから調査を目指す場合に、どういうことに気をつけなければ百濟の技術が直接来たことが言えるのか、考古学的なお立場から赤司さん、お話ししていただけないでしょうか。

赤司・そうですね、とても興味深いテーマだと思います、何が百濟の技術なのかというのは。例えば、先

程スライドでお見せしました城門の扉金具があります。あれは同じものが朝鮮半島でも出土しています。細かく見ると少し違うのですが、形状のほぼ同じものが出土しています。では大野城の鉄の金具は朝鮮半島から直接持つてきただものかというと、どうもそうではありません。分析の結果、砂鉄由来の成分が検出されています。砂鉄による精錬は朝鮮半島には基本的には無いのです。砂鉄で作る技術は日本でしかみられない技術です。つまり技術は伝わっているのですが、作ったのはどうも在地の人であるということが言えるわけですね。だから単純ではないと思います。

お城を造る技術は、今日、狩野さんも述べられましたように、喻えると現代社会のゼネコン（総合建築）でないとできないような技術の集大成が必要です。最先端の技術が全部集まっています。ましてや石工、大工、鉄器生産などいろんな技術が総合したものです。古代山城研究会でも、石積みの技術や石材の調達は各地でどのように行われていたのか、というような、細かい議論がなされています。

先程、古代山城の築城は国家的な事業だと言いましたけれども、実際には地元の技術力が用いられているのです。表でも土壘の構造上の特徴をグルーピングしていますが、おそらく設計の段階で、土壘の下部の列石は切石を用いるとか、土壘を巡らせる位置ですとか共通する部分があります。そういうことを考えますと、広域的な範囲で設計した人達が居ると思います。問題は『日本書紀』に書いてあるように百濟の亡命貴族である憶礼福留が直接関わったのかどうかです。の人たちは高級官僚であつて位の高い人たちですので、当然彼らは軍事戦略の専門家ですが、城づくりの細かいところまでは関わっていないと思われます。象徴的に百濟の人々の関与を示しているということでしょうから、百濟の伝統的な築城技術が分からないと、日本の古代山城の築城技術も分からぬのです。つまり、

まずは百濟の山城と日本の古代山城の比較、そして新羅の山城との比較も必要になつてきます。

ところが、これがそう簡単にはいきません。大西さんの話にもありましたように旧百濟領には、新羅が唐と戦争した時に造られた山城もあるのです。百濟にある山城が全て百濟の山城であるかというと、そうではないのです。百濟の山城を研究している韓国の研究者は、韓国にはまちがいなく百濟山城であると位置付けられるのは三つくらいとおっしゃつたことがあります。百濟山城を知るために、逆に日本に来て山城を勉強した方が、よほど百濟山城の特徴が残っているかもしないとおっしゃるくらいです。そういう意味では単純に朝鮮半島で見つかったものと似ているからといって、すぐに百濟の同時期の山城に結びつけるのは難しいところもあるわけです。先ほどの城門の軸受金具にしても下が四角柱の形状の資料を紹介しました。しかし、朝鮮半島の山城には、円柱形のものもあるのです。円柱形の場合には断面が丸いのできちんと固定するために周囲に鍔があり、鉢で止めます。つまり、城門の礎石だけを見ても二系統、扉の回転軸の金具が四角と丸の二つがあります。これは両方朝鮮半島にはあるわけです。実は丸と四角だけでなく、断面が隅丸方形の金具もありますので、三種類に分けられます。これに城門の柱が掘立形式や礎石式、さらには柱の形状が円柱と角柱などというように、さまざまな組合せが城門の礎石がみられます。そうするとそれをどう考えていいのか。

考古学的な考え方としては、いろんな設計思想や技術が一緒に入つてきて定着したというような同時多発的な考え方はしないのです。最初に定着した技術が少しずつ変化をし、また、別の新しい文化が影響をあたえて、また、少しづつ変わつていつて、先ほどお示しした礎石の図では、あるものは少し右に伸びたり、あるものは左に伸びたりという系統図を作らなくてはいけないのですが、まだ、そ

ここまで整理できていません。なにより総合的な技術

の組み合わせという観点から築城技術をみると
とが必要でしょう。鞠智城はとにかくいろんなも

のが見つかっていますので、研究材料としてはお
もしろいことになるのではないかなど思います。

藤・狩野さん、その朝鮮半島との関係についていか
がでしようか。

狩野・朝鮮半島の山城をそんな眼で見たことが一つも

ないのでわかりません。ただ、朝鮮の山城にはあ
あいう日本で神籠石山城といわれるような、城壁
がずっと下の方まで下りてくるような、あんなお
城は無いのですか？

司・基本は籠城を主目的にしていますから、防御性

を高めるということでは、高いところに城壁を構
える方が有利です。ですので、低いものはほとん
どないですね。古い時期には無いわけではないで
すね。集落を土壘で囲んだりするものです。そう
いう平山城が、平城ひらじやうといった方がいいでしょうか。



写真 10 パネルディスカッション熊本会場

無いわけではないです。

狩野…でもその周りの土地との比高差で城壁をみた時にはだいぶ低いものと高いものと、それは両方あるわけでしょう？

赤司…ありますが、基本は高い所にやはり設けます。

狩野…やはり実際に実戦で使った城との違いでしょうか？

佐藤…狩野さんのお話の中では、白村江の戦いの危機感の中で、天武朝の兵制改革とか大きな全体の国政の動きの中でとらえるべきだという指摘がありました。大宝律令とともにそういう国際的な危機感が遠ざかって、瀬戸内海の古代山城については機能しなくなつたと、国際関係の中で理解しようというお話があつたと思つたのですが。

狩野…そういうつもりですが、あなたの言うようにそんなに面白目には考えていなかつた。

会場…（笑い）

佐藤…そうですか。鞠智城はその後も一応、続いているのですよね。九世紀まで。それはそれなりに鞠智城の機能をどうとらえ直すかという。

狩野…そうです。それは、九州の城は大野、基肄、鞠智だけでなく、その他のいわゆる神籠石山城といわれるものも続いているのではないかと思います。全部が全部続いたかどうかはともかくとしてね。阿志岐は続いていると思うなあ。西の福岡平野側の水城に対して、こつちはね東の方の守りの城だから。ああいうものは続いているような感じがしますよ。

佐藤…水城は、一三世紀のモンゴル襲来の時まで機能していますよね。大西さん、今日のお話の中では新

羅の国防のあり方についても教えていただいて、そういう比較の仕方があるものだと思ったのですが、いかがでしょうか。仏像については後でまたお話を聞いていただくことにして、朝鮮半島との関係ですね。西・私が韓国に留学していた頃、東北大学に韓国の山城リストを作った井上秀雄先生という方がいらっしゃいました。調査のお手伝いをしたこともあるって、懇意にさせていただいたのですが、その後先生はリストが出来上がるたびに送つて下さって、最後はまとめた本を送つていただきました。その中に新羅の中核となる慶尚南道、慶尚北道の山城を、文献などから確認できるものを中心に全部網羅していました。あの先生は精力的な方だから網羅していくのですね。それを見ると、新羅を遡るものも含まれていますが、高麗時代、朝鮮時代を全部含めて、少なくとも慶尚南道と慶尚北道で何個あるかというと、数えたのですが六六一個です。それから明らかに高麗、李朝と思われるものを省いても約四〇〇位残ります。百濟とか高句麗というのは途中で滅びますね。新羅はその後、少なくとも今の平安南道から下くらいは支配下に置きますから、旧来あつた山城を利用しながら、その後さらに増やしていく可能性はあるのです。だからそういう数になつてくると思うのです。よく百濟の出身地は、ソウルの南の広州だといわれます。ですからあの辺にあるものはほとんど、百濟の出身地だか百濟の城だと皆がそういう認識をしていた。ところがソウルの調査なんかに入つてみると、これは新羅だというように変わつてきているのです。だから国が滅ぶというのはどこかでブツンと切れてしまつのですから、百濟系の山城というのは当然少なくなつてくると思うのです。だから新羅のものが多いのは当たり前で、それだけのものがある中で全国的な調査というのもこの山城についてはなかなか難しい。どんな城が出てくるかというのもなかなか難しいところだと思います。だから調査が終わつた

佐

ものから、赤司さんのように拾い上げていって、比較などをやつて行かざるを得ない面がある。私なんかは典型的なものとか、ある限定したところで少し別の視点からそれを見てみようと言つたくらいのところですから、皆さんの中道な研究に頼らざるを得ない面があると思つていますけど。

藤..ありがとうございました。先ほど赤司さんも、日本に残っている古代山城の方が百濟の古代山城の方をよく示しており、百濟の山城にはその後いろいろ手が加わっているというお話もありました。これからいろいろな形で、主には考古学的な調査によつて明らかになつていくのかと思います。それでは三番目のテーマに移りたいと思います。大西さんのご講演には城柵と仏像あるいは仏教というお話がありましたし、あるいは赤司さんのお話の中にも貯水池から陽物の祭祀遺物が出てくるということもありました。貯水池の性格は農業用のため池なのか、山城に特化した貯木場なのかまだわからぬと思いますけれど、確かに城柵と仏教、神器というものは密接に結びついていると言つていいと思います。そうした城と仏教・祭祀という点について、今度は大西さんの方から口火を切つていただけないでしょうか。鞠智城でどういうことがわかるのでしょうか。

大

西..私も何故、貯水池から出てきたのかなどといったところです。今確認できているのは、鹿児島や熊本からでてきた仏像は初期の観音菩薩で、いずれも百濟系の仏像であるということです。築城に関わった百濟系の技術者ですが、将軍というよりはどこに山城を造つたら良いかを考える、なかでも地形を利用してどこに水が確保できるか、それが一番大事なことだと思いますね。ただ連れて来られて、ここに山城を造つてと言われても、先ほど狩野先生がおつしやつたみたいに地の者が関わらなければ地理も地形もわからないでしようし。そうしたなかで、どこに造れば一番良いかを指導することにあつ

佐

たのだろうと思います。そして陽物ですが、ようもつ？ようぶつと読むのですか？私なんか男根なのですけど、そのようなものなのでしょうね。先ほども言いましたが、仏教を広めていくという面では、当然、侵攻して行つたところに仏教を広めていくわけですから仏像も必要、僧侶も必要ということにつながると思います。それからもう一つ、佐藤先生の専門だと思いますが、隼人などを攻めていく時に神社に祈願し、その力を借り遂に平らげるといった記録が出てきますよね。あれは確か大宰府が所管する神社が九社だったと思うのですが。神仏一体となつた、そういうことが伊勢神宮が出来た後の日本では起きてきているのではないでしようか。

藤・律令国家は中央の官庁でも、神祇官と太政官の二つのセットでありますし、大宰府にも神司かんづかさという役所がちゃんと置かれて行政と神祇が一体となつています。大宰府には觀世音寺が置かれて、都にももちろん南都七大寺のような立派なお寺が国家的に営まれるということで、律令国家と国家仏教もセットであります。七世紀前半でも、最初の勅願寺といわれている百濟大寺は百濟の宮という王宮と一緒にセットで造られています。東北の城柵の場合は、陸奥側で一番最初に築かれたのが仙台市の郡山遺跡ですが、これは最初の段階にはないのですが、二期になると郡山廢寺ができると寺と城柵がセットになります。だから九州の古代山城の場合でもそういうことがあつてもいいのではないかという気もいたします。これについてはどうでしよう？赤司さん、城柵と仏教系の遺物、あるいは神祇神祇、祭祀遺跡との関係は、どうでしようか？

司・私は神籠石神域説が明治時代に唱えられましたが、山城の機能としてその見方を決して否定していません。おっしゃるように大野城でも八世紀に入つたら新羅調伏のために四王院を設置します。兜跋

毘沙門ですか、持国天ですかそういう仏像を四方に配置します。だから四王寺山という現在の山の名前が生まれたわけです。神仏の神威によつて敵国を討とうとしたのです。同じように高良山神籠石という山城があり、現在高良大社が祀られていますが、祭神の一人が住吉の神様です。また、御所ヶ谷神籠石の近くに住吉池という地名が残されています。住吉神は神功皇后が渡海する際に守護したという神様です。戦に際して、昔は人が行くだけでなく、まず神様が行き、その後に人がついて行くので当然にして切り離せないと思います。古代山城があるところに、海の神様が祀られているということは、やはりこれは考えなくてはいけないと思います。仏様もそうだろうと思います。

ところで、鞠智城の八角形建物もよく考える必要があると思います。考古学的にはあのエリアは倉庫建物が配置されていますので、倉ではないかと言いたいところですね。文献記録には倉の種類に八面の倉というのがあります。実際に関東地方で八角形の倉が見つかっているので、あれも倉だと言いたいところです。しかし、一方で建築史的には八角建物の中心に柱穴があるのですが、これは心柱以外の何者でもないというのが大方の見方だらうと思います。ということは塔の可能性が高いということです。現在、鼓楼として復元されていますが、塔の可能性という、仏教的な影響も考えていいのではないかと思います。鞠智城の時期変遷の中で塔と思われるものがあるということを再度考えた方がいいのではないかと思います。

狩 佐 藤..はい、狩野さん、その続きでお話いただけないでしょうか。

野..塔ですか？あんな真ん中に塔を造るかなあ。そこまでは考えが全然及びませんでしたけれど。さつきの大西さんのお話を伺つていてね、やはり何かこう、戦争がはじまるかもしれない恐怖感とか何か

そういうものだけで山城が出来たのだろうかという思いは少しありましたからね。そういうものを信仰という問題を通じてね、人の気持ちを少し和ませるということだつてあるだろうし。しかし、そういう仏教信仰の対象になつたのは一般の人々というよりはむしろ豪族クラスというか、そういう人たちというふうに限定して考えるのはおかしいのでしょうか、大西さん。もつとたくさん的人に広めることを考えた方がいいのでしょうか。

大西：仏塔かどうかわかりませんが、当時の仏教を考えるときに私が気になるのは、天武天皇亡き後の持統天皇の存在です。あれは確か六六〇年代のことだったと思いますが、唐使の郭務悰かくむぞうという人物が度々『書紀』に出てきます。この人物に関わる記事も重複して出てくるのですが、天智天皇の容態が悪いというので仏像つまり阿弥陀を持つて来るのでした。これが繡仏（刺繡でできた仏像）なのか描いたものなのか、仏像の素材については何も書いてないのです。しかも壬申の乱の混乱もあって、天武が即位した後も郭務悰が持つてきたことは分つていたが、そのまま大宰府に留め置かれてしまう。面白いことには中央（皇室内部）ではこのことを知つていまして、今度は天武が亡くなつた後、持統が天武のために薬師寺にでかい繡仏を造ることを発願、その参考にしたいといつて大宰府に届けさせるのです。薬師寺といえば勅願寺（天皇の発願によつてできた寺）です。くだらおおでら百濟大寺に次いで、飛鳥の藤原宮にできたのが薬師寺です。天皇の詔というか発願によつて創建されたというのは大変なもので、法隆寺といえども天皇でない者の手で造られた寺とは画然たる格差があつたのです。その後、大官大寺（諸寺を管理する寺）のような寺が出来て、寺や僧侶もきちんと制度化されていくわけで、その中で格差も広がつていくことになります。ですから、先ほど申し上げたように、持統（天皇）が阿多や大隈に

仏教を広めなさいと言つたということは非常に重い意味を持つていたと思います。鹿児島の吹上町上田尻というところから仏像が出てきましたが、鹿児島の南薩摩市には今も阿多という地名の駅もあります。正に阿多の中心だったようです。その隣がこの吹上町の仏像が出たところなのです。ここはかつて阿多郡に含まれていましたから、正に『書紀』に出てくる阿多の地から古代仏が出てきています。持統朝になりますとよく帰化系の人が逃げて來たようになっています。本当はもっと前から百濟の人達がたくさんやつて來ているのですが、持統朝になると新羅の人が大勢まとまって來たことになつてゐる。僧侶もたくさんやつて來ている。あれは何故かというと、新羅の支配下に組み込まれたから新羅人としてやつて來るのであって、実態はほとんど百濟とか高句麗の人だと思ひます。当然、そういう人達がまずやつて來るのは九州ですから、そういう人たちが新開地の蝦夷とか薩摩の地方に仏教を広める時に派遣されたのではないか。もちろん真っ先にとは言ひませんよ。でもそういう人達も、仏教圏を拡大することには大いに関わつていつたのではないかと思つています。また、日本社会の中でそうした人材を活かしていく点では、非常にいい方法ではなかつたのかという氣はしますね。

藤・その辺りについては、熊本県でも白鳳寺院の遺跡もあると思ひますけど、そういうものの展開と鞠智城がどうリンクしてくるのかということがこれからまだ課題だという気がいたします。時間のことを気にして申し訳ないのですが、最後に四つめの鞠智城造営の目的というテーマに移りましょう。今日のお話の中ではあまり対外的な最前線としての鞠智城という性格の指摘はなかつたと思ひます。一方で大野城とか基肄城の兵站基地としての鞠智城のあり方、あるいは南の隼人世界への前線としての鞠智城のあり方というお話はあつたと思ひます。最近、狩野さんが関係なさつてゐると思ひますけど、

岡山県の鬼ノ城では、築城時代が少し後ろにズれて、天武天皇時代の国内支配のための山城ではないかという話があると、先日新聞に載っていました。そういうところも含めて、私は対外的・国内的といつた機能が重層的にあつてもいいと思つてているのですが、築城の目的について、いかがでしょうか。狩野さんから今日阿蘇山との関係という指摘があつてなるほどと思ったこともあつたのですけど、鞠智城の立地条件からの理解にもふれていただければと思います。三人のパネリストの方に順番にお話していただければと思います。最初に赤司さんからお願ひします。

司…では、簡単に述べます。鞠智城の名前が天智朝期に現れていないので、白村江敗戦後の戦略は、海浜部に防人を配置して、内陸に山城を築くということでするので、これは蒙古襲来の時に博多沿岸に防壁を築いてここで蒙古軍と戦ったように、やはり本来は第一次には海浜部で敵を迎えて討つことを想定しているわけで、それでもダメな時に内陸の山城に立てこもるという戦略です。当時、朝廷が九州をどういうふうに見ていたかというのはよくわからないのですが、例えば九州に関しては武器生産を禁じています。当時の九州は筑紫君磐井の反乱伝承にみられるように新羅と手を結ぶなど、ヤマトからは信用されていないですね。九州に対する防衛の前線を置くにしても、九州の地域そのものを掌握する必要も同時にあつたと思われます。内外ともに対応するという点では鞠智城も、大野城・基肄城と一連の中で築かれたとは思いますが、この鞠智城が直接有明海を見ていたのかと言われた時には、それはないだろうと。それはやはり当時のルートとしては玄界灘ルートがメインであると言わざるを得ないわけです。鞠智城は当時の、九州の中での、九州そのものが辺境でありますけど、辺境の中のさらに辺境のフロンティアに置かれるだろうと思いますし。やはり阿蘇、阿蘇の話が出てきま

したが、阿蘇を通じて日向に向かうその道ということがやはり大事だったのだろうと。それから立地でまた繰り返しになりますけど、この平坦地を選んだというところにやはり兵站基地としての、集積地としての意味を強く持たせたのではないかなというのが私の意見でございます。

佐藤…では、狩野さん、お願ひします。

狩野…それはやはり、有明海側からの敵の攻撃を防ぐという意味はもちろんこの鞠智城にはあったと思いますが、大野、基肄、鞠智城の三つの城に大宰府が当初期待したもののは何かということですね。三つ並べて言っている時に鞠智城に期待したものは肥後の経済力といいますかね、水田の開発力というのが一番ですからね。肥後の国は、田んぼの面積にして、大和や河内の水田面積とは比べ物にならないくらい大きいですよ。大宰府が期待したものといつたらやはり肥後の国が持っている経済力ではないかと思います。さっき赤司さんのお話にも大野城に整然たる倉庫があるというお話があつて、鞠智城のものは自由な配置になつてというような話がありましたけど、倉庫の数だけは相当なものですよ。そしてその不動倉というものはもちろん大野城にもあつたでしようけれど、文献に出てくる不動倉の唯一の例は鞠智城ですよ。不動倉が焼けたっていう記事が出てきますでしよう、平安時代になつてね。そういうものをたくさん持っていた鞠智城に期待したのではなかつたかと思います。もう一つは阿蘇との関係を言うと、二重の馬の牧ふたえ（牧場）ですよ。阿蘇に行く二重峠の近くにある牧です。そこの馬の牧はものすごく上等な馬がどれ、それをまず朝廷に献上し、かかる後、余りは大宰府及び九州の国で使えという記事がわざわざ延喜式の兵部式に出てくるのですよ。一條を割いて。ですからこれも鞠智城の兵站基地的性格をあらわす一つと考えますけど、馬を訓練する場所が鞠智城の中にもあつてそ

ういうものも含めて大宰府は鞠智城に期待したのではないか。以上です。

佐

藤・肥後国は古代の西海道における最大の大國だということも含めですね。また、岡山の鬼ノ城なども瀬戸内海に面したところではなくて、少し奥まったところで生産地を後ろからこう睥睨するような場所にありますね。だから鞠智城もそういう性格があるのかなと私も思いました。それでは、大西さん、お願ひします。

大

西・目的というのはなかなか難しいのですが、今日の話ではたまたま鹿児島から仏像が出て、それが阿多の地である。仏像の年代も古いものであつたということです。また律令制が及んでいく時に仏教も伝えられ仏教圏も広がっていく、当然のことだと思うのです。もしそのことと強いて関連させるとすれば、何故に文武二年（六九八）のところで鞠智城の名前が突如出てくるのか、しかも大野、基肄、鞠智と三つ並んでいる。そのうちの二つは少なくとも北の防衛拠点として名前が出てくる山城でないか。それらと一緒に出てくるということは、一緒にあげなければならない理由があるはずで、私としてはそこのところを考えようとしたのです。それはやはり鞠智城の役割が大きくなつて、あげざるを得ない一面を担つていた。しかもそれは大宰府の管轄下での役割ということになる。大宰府の管轄下で大野、基肄、鞠智とあがつてくる時に、考えてみれば大隈、阿多のどちらにも行けるところに鞠智城は位置しているということで繋がつてくるのですね。鞠智城の役割に關し後方支援ということ考えがりますが、当初はそれでいいかと私は思います。それが今度は逆に裏から表になつて前面に出てくる。だから当然『書紀』にも取り上げられたのでしょう。それから文武天皇ですが、草壁皇子の子すなわち持統の孫にあたりますから、当然、持統から發せられた詔を、孫としては実現していきたいという

意欲もあったのだと思つています。今日はたまたまこの持続の詔を取り上げ、鞠智城の新たな役割として考えてみたのです。もちろん鞠智城は兵站基地でいいのですけれど、この詔によつて仏教を広めていくことが大宰府の役割として大きくなるきっかけだつたような気がします。

狩野・今ね、大西さんが言つたことに関連して一言。鞠智城は三〇〇年も続くわけですから、城をどう活用するかは、その時々の政治情勢によつてずいぶん違いますから、さまざまな役割を当然持つただろうと思います。私が最初に申し上げたのは、当初に造つたときの鞠智城に大宰府が期待したものは何だつたのかという観点で、あんなことを申しました。

藤・もう時間が過ぎておりまして、そろそろ閉じたいと思います。今日のパネリストの方たちの話によつても、鞠智城の解明については、これまで今回の報告書に見られるような発掘調査成果があがつてきただけですが、それを元にしてもまだいろいろな課題がこれから有りうる。さらに調査はこれからも続くし、本当の意味での解明はまだずっと続く課題ではないかなと思います。それとは別に、史跡として保存していくという仕事はそれなりに続けていかなくてはならないと思います。熊本県教育委員会では、こういった発掘調査結果をまとめた本や報告書だけでなく、わかりやすいパンフレットも作つていただいております。私の聞いております範囲では、今年は若手研究者に研究助成の制度を作られて、全国に研究を公募したら五件採用のつもりが四〇件もの若手研者の、若手というのは四〇歳以下だそうですけど、鞠智城に関するこういう研究をしたいので研究助成を欲しいという応募があつたという話があります。そういう研究成果もこれからまた公表していくことになつております。この後、来月に九州国立博物館でのシンポジウムもありますし、まだまだ鞠智城から目が

離せない状況であるということをお話して、拙いコーディネーターの任務を終えたいと思います。時間をお一バーしましてどうも申し訳ありませんでした。今日はパネリストの皆さん、どうもありがとうございました。